

## 当院職員における腰痛の現況 - ノーリフトケアの重要性

医療法人衆和会 長崎腎病院

○上谷しのぶ 山口由希子 林 涼子 福本 駿 北田恭平 河津多代 久原拓哉 澤瀬健次 橋口純一郎  
小松利恵子 原田孝司 船越 哲

### 【背景】

1994年に労働基準局から「職場における腰痛予防対策指針」が示され、その後製造業等で腰痛は発生病数が大きく減少したものの、介護・看護の領域では逆に増加の傾向にある。

### 【目的】

当院の職員の腰痛について、保有率や誘発する要因、また就業に与える影響やノーリフトケアの意識について調査する。

### 【方法】

2019年8月～9月に当院職員207名全員に自己記入のアンケート調査を行った。

### 【結果】

男性58例女性149例、平均年齢は43.3±14.1歳、アンケート回収率は100%であった。職種の内訳は、介護職24名、看護師81名、看護助手22名、医療技術職22名、事務職12名、清掃職23名、その他23名であった。既往も含めると腰痛の保有率は77.3%と、他の報告(60-65%)を上回る保有率であった。腰痛者の誘因(複数回答)は、「不自然な姿勢」が56.0%と最も多く、「重量物を持ち上げる時」は32.9%であった。腰痛者のうち「腰痛のために休養が必要」、「退職も考えた」と感じた職員は35.6%であった。腰痛緩和の必要性は45.4%が感じており、ノーリフトケアを知っているスタッフは全体で19.8%であった。

### 【考察】

今回の調査では、腰痛の誘因は不自然な姿勢が最も多いことが示唆され、休職や離職に関連する可能性のある深刻な問題と思われる。一方、ノーリフトケアの認知度は低く、この啓発と普及は重要と考える。